夫木和歌集抄二八

雑十

日本政府圖書

和書門

類	號	函	架	冊
	二五五五五	一二	九	三六

内閣文庫

類	號	函	架	冊
和書	二五五五五	二〇〇	三四	三六

内閣文庫		
番號	和	25555
冊數	36	(28)
函號	200	215

国立公文書館
National Archives of Japan

夫木和歌抄巻第廿八

雑部十

題

草　竹　篠
葛　苺　日陰草
山橘　浅茅　茅花
薄　鞍草　蕙
海雲　藻　薦
蓮　思草　忘草

浅草文庫

百代草　日蔭草　尓古草

木　菅　萱

濱木綿　小々薦　藍

紅　紫　麻

藻　淺沙　蒲蓉

芹　水葱　母子草

弱整　太子草　土筆

析　敷草　濱草

莞草　射干　莎草

芝　目芝草　夕陰草

指燒草　藻　平向草

芭蕉　莫叫菜　和布

草　　後京極摂政

さをしかの入野の秋の枯れか露に
これ妻こふとそなくしすゝらん

入道大納言宗嗣

浅茅原毛久とふ人の跡のつゆしきくさ　よみ人しらす

次に此逢の歎夕に秋萩すま
かよふらむらは淀かも川なる河

浄くの橋に舟こゝのき渡に　祭主輔親

奥津浪立重によするの浪へつるは

もろかたらひし見しもりかりけん

宮の御方にて月を見てよみ侍りける　法印泰覚

わしかまうくえあつめけるにひしえ
みるめなしもまたれありもしと

寿永之後前大僧正よみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

むかしのなりけりの月まいまそかとも
秋えのはしこそてこそ色なく

おもふ集けりのをよ　元輔

雲ちせくも秋風さくさくてはさえ
りよのまちくしぬ人なかと

寛和歌合にしよめる　信実朝臣

大かたなりの河水下に埋木も
たえくのまれ折果ぬるなく

寛集三中のよみ侍る　忠岑

春のはいさぬ花なくみるまとも
とひせきはなれたまりせなし

亭子院中宮歌合の歌　源師賢朝臣

物をのみ思ふやかれかなしん

ちるの草はみなかれゆくとも

右は新勅撰夏草

慈鎮和尚

花ありとしもおもはぬ草の

宿の色しけりあふそそめけり

新古今冬(?)

従二位家隆

志賀の浦の入江にゆく(?)高草の

たつみなみかへしさむしき

新古今雑(?)

前中納言定(?)家

名におふ(?)達(?)の松の何に(?)なり

色けふみなつ(?)くさのねの子(?)

竹

新古今賀

小侍従

ふりもせてあへてうつろふ人の

世のちきりやとの代の竹

新千(?)万又

よみ人しらず

梅のはなちらまくおしみ我園の

竹の林に鶯なくも

御室(?)家(?)歌(?)合(?)

参議為相(?)

山かたに枝の葉ことに吹落て
うすくもりゆく竹の下風

正治二年百首　　後鳥羽院御製
霜清ゆるよの月はかけ清さむ
窓の竹のうへにみとりなるを

宝治二年百首　　民部卿為家
雨とのした色の竹の葉ぬれてそあり
くれはのかゝる露の志つくなる

嘉禎新百首　　光俊朝臣

岩かこふ竹のさ枝のしたつゆや
秋の色はのとまりなるらん

新葉集冬歌　　後宗内大臣
宜人の朝夕の竹のうちしむ縄
みけていのりしたまふをそ

新葉集神祇　　殷富門院大輔
しつかなる家ともの竹のよの
枝よさへいかりもてなるらん

夫木秋百首　　六条院宣旨

竹の葉にふりかくしつ夜のまにあかなく
尾上にさえて秋へも見えしきぬ
隆祐朝臣

二条院讃岐
井の中の水にむかひしとかくしてこの
人のこころはあやにいはれぬなり

法印 ろえ
後京極摂政
君がためり尾上にさえて秋にあるとき
竹の林のおくをたつねつゝ

家長朝臣すゝめ侍りける鮎竹乃名を 同

ゆくりて川井の底に雪ふかく
あちらに隠れし家の川にさし
家隆

ろえ方
秋ちかき竹の葉に山風の
さえゆあつる時庭のこゝ音
同

同
篝火のかけの床にも井の雪を
わかみにさしかくもりなけ

ろえ方
衣笠内大臣

風吹ハ竹のさやさやし秋きぬと
里も宿けなく夕の暮の那　正三位知家

同
竹の葉ふも波りかゝりてかゝるも
きなれのさとれ夕露ぞし　家隆

家の竹れなよれのよゝそよ風
契有てやあふひそか言ん

堀川院百首　仲実朝臣

いかにしはせは賞なる人もみな
竹をとゝして年をへにきけ

家集竹のことおさなきわらはにつくりてとて　大江匡衡朝臣
親はなあむりしは人ハぬなけれと
竹のこはなみなみゝるもめてし

ゐ　よみ人しれ
宮ゐそめくしる親のさあらなめ
こハさかりなる竹としてみ達

嘉禄元　光俊朝臣

いかはかり雪の下なる竹のこゑ
あやしき人のすみかなるらん

建長元年百首 人丸年
為家

よるよりそ竹のこゑ
あらの葉ふく風のうけふきるらん

文永元年七社百首
後九条内大臣

年ふけてこゑりにあひしは河の
人の名のみやあらしの呉竹

宝治二年百首 嘉禄新古
光俊朝臣

呉竹のよのよゝのむかしに
むかしこれはあさまなりけり

嘉禄宝治二年百首 堅竹
従二位教氏

三後世夜波もさすこそ川上の
拓ちの村よりなかしく呉竹

百首
家隆

何よりぬとものう拍葉ふとつもまとて
名もかはらぬ庭の呉竹

りょうさ秋月経り
定家

月きよみ玉ぬきとめぬ呉竹は
ち世をとなふる秋風そふく

光嘉徳会に京極王家にて竹 寿　同

万代まてうれてかりめある川竹の
ましき下はに霜のおきそふ

文治六年女御入内屏風　隆信朝臣

久しかるへき君か世をその川竹よ
後の世も色さはかはらぬ友とならむ

同屏風歌　従二位頼氏

風吹はみきりになひく河竹の
音もかはらぬ千代の流かな

弘安元年百首歌に竹　前摂政左大臣

もゝしきの玉のみきりのくれ竹
君か代なかくうへやそめけん

三條院七百首歌　右衛

くれ竹のよとをかる風の涼しきは
一夜よそく秋やきぬらん

七夕百二　人丸

秋風山こえてかりやなよ竹の
声よはらいつゝすまひかりてう

天元四年四月少将義孝家歌合人しらす

旅まくらぬいよひとしらいつよ竹の
下をとねさすこふかそまきれ

久安百首

節竹を折ふしことにかほしとハ　待賢門院堀川
行人は都もこふやらむ

文永二年八月亭院百首　竹風晩涼　皇太后宮大夫俊成

節竹に宿る鳥の音も涼しきハ
秋のすゑへの風や吹らむ

六帖題一条了為家　光俊朝臣

山川の垣ねかくれのよ竹の風
よ海せられなとそあひみそあらん

建保二年内大臣家百首深竹風　従二位家隆

うきふしてたえぬ人もなきなれや
身をとりしもしはいふ竹

新六帖百五十年題竹　よみ人しらす

我宿のいさゝむら竹吹風の
秋におとろく夜のよの夢

嘉禄元年二百首の内 竹　前大僧正円長

うきふしをおもひも知らぬ竹
思へとも隔てそちなりけるかな

たのめしあけさき竹とよみ侍る　左京大夫
　左親王之良

其の竹のよしはまさにたのまれて
よしふしともなきまころの

万葉雑部中　西行上人

冬されの風をとさえて姑射の竹ハ
さえたかりのゝ聲しらく

同院摂政家百首山家　花山院入道太政大臣

うたこしろの竹の園まてをやつ
あらましやさきハ家にあらもとなと

文永元年七月左大臣家百首歌 竹　源仲正

夕間暮ハ酒の林もこえつけと
庭すたれの室ぞ夜ハ涼しかな

題しらす　慈鎮和尚

人心すなほなるへくは海の竹君
ゆりもとはたゆくみよし

文永百首　　同

浦雲に鹽竈の河原とふきさへ
をく浪の竹の下わたす寄り

同　　同

みちのくにふさく次の家の呉竹に
鹽竈の上山の山路しの風
よみ人しらす

ふる雪にとふらん竹のそのわけて
一夜もみえしとよりふしけるこの節

弘長二年百首　安嘉門院四条

さこねらや山嵐そよくさゝ竹の
末のりうゝとれてあまたまたし

千五百番歌合　為家

山河のさゝひ波ひくはら竹の
よよくしらて世をやわたらん

建仁元年老若五十首歌合　後鳥羽院御製

西のうミあら波まさり竹の
一乗のみのりぬ雪の日まては

寛元新六こおり竹　　信実朝臣

数ならぬ三河の垣ね風あらき竹
末おりかけてよをたてくさん

同　　知家

くれ竹の節ゐにもよゝはさらす
去おりしほる風かうき霜

建保七年殿歌合千首歌　　光俊朝臣

うへ竹のよしさへところ風吹を
ちよおもしろくわかまさされや

篠

新古今羇旅　　人丸

さゝの葉はみ山もさやにみたれとも
我は妹おもふわかれきぬれは

題しらす　　よみ人しらす

かくしてやなほや生なむみ雪ふる
大あらきのゝさゝにあらなくに

保安二年関白内大臣家歌合　権中納言師俊
くれ渉やあらしの山に行ぬらん　玄尽は見え集あり
をゆくあらしの海の秋風

治承二年右大臣家百首　安家[illegible]
緑なる[illegible]ハ春の月影りて
浮の葉生りしきゆく白雪

文永二年毎月百首中　為家
くれ東ゆくかりやからのふく
葉ハくらす道のまさへも見ゆるかな

同七年毎月百首中　同
よるをまつしらくもかゝる嵐山
いつかのその霧さへなり

同八年毎月一首中　同
嵐やらんをはれの霧ハ立て橋本
かよふりし跡も見えぬ山のへ

良経家百首　家隆
月さえて夕霧しつむ遠ければ
あさき[illegible]みるさへしぬの山

家集百首

旅ハさぬ夜も嵐も月やすみ川　同
起よ川しらぬの山のはれまさく

建保五年内裏歌合　順徳院御製
武蔵野や鴬なくこゑのかすみにて
あつまよのこ路ハれみしの神

安嘉門院四条
すみ川あふ里ありしく袖ぬらして
行かへとをくのちのれさかりけり

此歌ハ東へ下けるに　野路
とよ川そて日くれかかるく
時雨しくれハとまく

百首歌合　同
いさみぬやむこ山りしみをさらすよ
うつ風のやまあつまこゑれあり

家集雑歌　権中納言定家
さ夜ふけてむこの湊嵐さえして
月ハ夜なれあすあれさかりけり

同集恋歌　　　　徳大寺左大臣

時鳥よる大あらきをさくらん
めぐりひとつもなくなくや

建長七年夜千首歌　　前大納言為家

行くの跡も上白雨よころまて
大あらきのもりに雪ふるなり

宝治二年百首歌　　後嵯峨院御製

さくのたもとさかし京東ハたえきの
思ひしゝかみよはひめる

同　　　　　　　　俊成女

深くとくハ塩の煙の玉さくれ
見るハ多世の末のみとりと

同　　　　　　　　後九条内大臣

もゆくよ何ハくる袖ハ家居て
後うきのひかり思乃ゆるひち

同　　　　　　　　衣笠内大臣

あさしつくさかく思の人の家なり
何とけるぬきつゝ折り

同

くさとめての衣に秋もかさねつゝ

わすられぬ霜の下草　　同

光俊朝臣

ゆくとも御君もひとつにうつる星の

すみしゝ影のとりに見えるかなハ

同

鷹司院帥

菊かれたふ日の影をとまちてこれハ

露のこゝろをとふらふ也

建保四年百首歌合　九条中納言基氏

家むすふ夜をゆくりをとふ後世は

末葉にかゝる秋ハ来すなり

正治二年百首

宜秋門院丹後

夜の間にも汀の月をさそふ風ふけて

霜よりさえて池の水の氷

[illegible]百首

具親朝臣

花にあかぬ吉野の山のさくら花

やよひの月のほかくれける也

百首哥　慈鎮和尚

五月雨は吉の野にとまる雲の
きえりそなかれみはれやまりし

千載集ミと　俊頼朝臣

山川の岩間のさてにとまるに
思ひしいかにあさましまきり

同攝政家百首思恋　定家

うへしけるかれ秋の野さく原
しるしきぬ言はうれしもなし

嘉元百首　信実朝臣

山川にさかきてのさくらさくらぬ
みさこよ海くれ袖とやこし

同新古二　同

妹せ山中に生ふる玉さゝの
一夜のへたてさりともけさ

葛

康元二年毎日百首　民部卿為家

いつくより冬もかるらん秋の山の

林葉のつきもいろさきさなしよ

千五百番哥合　　　家隆卿

春きてはいく世の山のさくら花

万代まてものへのるへし

大嘗会主基方屏風近江国　　宮内卿永範

粟津野の小萩か花もいろそへて

時しりかほにまつしらさき

題しらす　　　　　卜部兼直

人の世のかはらぬ宿のさかえ花みけれて

三つ葉四つ葉にあつめむかふ

六帖新五十一　　　正三位知家

いにしへのまつのみなもとさへ花の

三葉四葉にさかふるものを

梅

延喜十年内裏屏風　　　貫之

梅かゝをたもとにうつしとめたらは

春はすくともかたみならまし

延長七年内裏屏風　　　躬恒

いく千世とかきる松にかはらぬ梅こそ花は
年のをとゝむる色の花の色
よみ人しらす
玄玉一
ときハなる松にかはれる梅なれは
年のをとなきまさるとそみゆる
玉葉後四條
清原元輔
萬代をちきる梅の清のさきまさるは
ことしかりそ昔はむかしなりけん
堀川院御百首
権中納言公実
さほ姫のあやおる松の山の
春ねかふるの梅のむしけれハ
前中納言匡房
同
深みとり岩もるかたちにし生梅は
色かりのかたぬ色ぬるらん
権中納言師時
同
年こゝは昔のこゝろをもひるそ
君のこゝは花さこにかなり
新葉菅上宮
源仲正

年ふるはいかならむ霜かゝりて
老にかゝれる苔の色みせ
文集百首　慈鎮
苺の苔かゝりし秋の山ぞしく夕苔
述懐百首　皇太后宮大夫俊成
岩かゝし山のをくその苔むしろ
ところへかしもおもほゆかな
千五百番哥合　定家
いく世へぬかさなる阿せんのみ苔

三條の桧原の苺の色緑
保安二年九月十三日内大臣家哥合　基俊
石の上乃苔の衣とさく露を
むしろ庭とみけるやいかゞ
永久四年四月内裏後宮哥合　庭苔　家隆
庭の面に苔のむしろをみなせ〔?〕
ちれいまし花の末よりそ
千五百番　為家
奥山の木の下ゝその雲のかゝり苔

おもしろきよりに年やふりぬらむ

嘉禄元年歌合　　中務卿親王

岩ふる年ふりにけり岩のうへの

苔のみとりも山のかひそなく

続集夕立　　同

かきくもりことそその山の夕立よ

萩ちりちらす楢の葉にちる露

宝治二年百首歌　　後嵯峨院御製

住よしとおもひん人はさあらむや

ことしふきてこよ苔のさむしろ

同　　衣笠内大臣

住吉と浦なれきしにかくれぬれ

松のみ経も苔むしにけり

同　　民部卿為家

まれにとてもうれしみ苔にうつしまさん

浪のうけかさそ苔のさむしろ

日陰草

古振録　　前中納言為兼

日かけまて影隔つるまたかくるかな
もれ代けてなほまつきとや　光俊朝臣

同新六一
さかりや木の下くらきみて山ま
あ浦色くしるかに日かけ草ふ

万代二　慈鎮和尚
こしかたかたの庵のいりもに
春ともみえぬ陰りけなきの

ひかけ後撰花
よき人志つ須

をとめこか袖のいろきの玉日かけ
ひかりのとけくるてそてにかゝる

ひかけ続拾六　従二位行能
あまつをすめ日かけのかゝるをみ世かけて
しもさらひまもといふころかな

夕日陰　光もとりけ之

影し寸万二　中納言家持
我宿の夕かけ草の白露の
けぬかにもとなおもほゆるかも

洞院摂政家百首　　家隆

きえわひて我なしはてむ露ふかき
みやましにしもあらはれて
山橘

新千　万　　人丸

君よりことそしけきをあしひきの
山ちさをとめつゝすみそし
　　　　　よみ人しらす

日方丈

けのころのわか名はたてゝ足引の

山ちさをとらはてつゝさはつ

洞院百首　　同

足引の山ちさの花のちるさく
ゆふひ影さしてあかつきも

貞永三年百首　　民部卿家

これはいかなる山ちさのけさそ
庭もせにちりしく花の庭のあか

新撰六帖　第一　　知家

ありあけの月のまつ風のきゝは

山さらくる人の名をとりつゝかな　信実朝臣

同

いにしへハみとりもあをきもえの

山櫻のさかハうつりけり

隆祐

野亭早春　よみ人志らす

我宿のあさちか付あさミとりの

かすミのきハ那葉あし

同

同

我宿の隆祐か付まさミとりの

ふるさとのよりかゝりつゝ　梅積皇子

同

旅宿ハあさめくらかり我宿の

あさちか花のあともしれそ

旅亭立　よみ人志らす

郭公都へこそゆく旅風よ

あさちさけとや昔のさりしさ

寄集客恋夢　隆現大夫殿季

露しもよ旅ねハたえやありけり
あさちかむしろよみきもし
拾集　基俊
ゆえぬるに旅ハ夜ふかき月影よ
あさちかはらをつゆやしつらむ
新拾万六　赤人
いなみのゝあさちおしなみさぬる夜の
けなかくあれハ家ししのはる
同万七
よみ人しらす

家にして我ハ恋むなゐなみのゝ
浅茅か上にてりし月影を
貞応三年五百首哥　為家
さのつゝめの床もさひしくいなみのゝ
浅茅をしなみよるの秋風
三百六十首中　好忠
草まくらおりかけて浅茅生に
柳こすゑにかれそみにけり
続拾秋六　従二位行家

きのふまて岩ねの雲ハいかさの乃れ
あさちかしけみ露そしてきり
寂蓮法師
行さらぬ庭のあさちか末葉に
影ハれ浮こそまり何毎はく
洞院摂政家百首
ゆふ露のむもれのあさちか白妙に
光明峯寺入道摂政
何の草葉も色ならぬこそ神
永暦元年八月右衛門督家哥合
五人
源雅定卿

みよりゆきのゝをのゝ萩これハ
あさちふとしるみとりハあさしたて霜
文集百首
家隆
露むすふ風のあさちか白妙に
旅の衣ハ風のさむけさ
同
慈鎮和尚
宵しほるゝ野山のあさちかつゝ
露ならて月代ゝ露の枕
此哥ハ文集百首莫弄罷源以

秋月晩昔竹窓下寒月
伝ところ事なしと云

嘉元二年十月竹園にて三首 叅議為相

露をしく庭の萩原のあさちふに
かりさけみる秋の夜の月

六帖題同前 中務卿親王[illegible]

二本松ぬ隠翁露寒之多萱の
霜のあさちに月秋風そふく

題しらす よみ人しらす

長月のあさちか原もをしなへて
かれ行にすむ我宿の[illegible]

文應元年七夕秋歌 民部卿為家

秋風ハたえよりれぬ長月の
あさちか露もいかなりぬらん

文永十年毎月一首中 同

紅秋の末へのあさちか露霜の
よるよるなれのかねてこほれる

文永二年毎月一首中 同

大原や小野のあさちの色なれて
露は人はらふ秋の夜の月かけ
権中納言定家
明応摂政家歌合に
夢よりも里の名のみやあはれなるらん
霜もあはれとのあさちふ上
式子内親王
ふるさとを
あまのかは伏見の里のあさちふに
むかしきゝ夢のうは秋一ふ
知家

むしのねのあさちか露にやとりや
秋空のこゝろもたえぬみらん
信実朝臣
月
あつち山ひとのあはれなるらん
露深みあさちかうへにけりなき
家集に名出
従二位家隆
ゆふ山夕日のかけのあさちふに
色なきかやかけのならんらん
菅原

新勅撰二

民部卿為家

古川のきしのあをやぎのあさみどり
つりする渚に浦の夕まぐれ

前中納言為忠

同

月かげのはれ渡りき山のはにうかり
つりするひきつく風まかするなり

君臣歌合

同

あさぼらけ芝生の露も渡して
つりする浦のいりうみの夕ぐれ

光俊朝臣

夕色さへ霞もきえぬしら舟の色に出て
流る舟のきこゆるをさそひん

前内大臣

同

夕雨の小篠野のあさぢふされは
つなぐ舟のうへのあまのほしなし

夫木集六帖中

好忠

つりぶねのあさりちかくも見えかくれ
よるとひかりのかげとみるまで

家集吉(?)字中　前中納言匡房

ちゑれぬなきぬ京のやまとまれ
ふけゆけり春(?)の(?)かよふ(?)べき

驚

新古今第三　浄(?)藤原(?)女

むかしだにむかしをしのびてはなとはは
かく恋(?)ありあかつき(?)恋(?)とぞ

同第廿(?)

旅(?)ゆふぐれ月山はさくら

後とかわかれもなかんとそ見え

同第十二　同

さまかえれ大江の山もみぢぬる
人むかしこころとぞはなかしに

建保二年名所百首　前中納言定家

ゆきかへる大江の山のもみぢば
旅をとりけん袖そ染しき

嘉禄三年(?)新古(?)二　知家

ふもと大江の山はきりこめて

くるしけくとはなけこえくのを

建保三年四月百首哥　従二位家隆

いそのかみふるの山風さむからし

たつたさきまきこほりそそらん

文永六年十五夜百首哥中　為家

むかしのゆきとききそへて大江山

生野とかけてすくる夕立

千首哥　同

旅ねするをさゝすそのゝ露の玉ちる

さゆる夜は時雨しもしれゆらん

続千六帖　中務卿親王

こゝ山本の風まよふくさ露まちらん

とつけにくる色もみえて夕あかね

加茂百首　よみ人しらす

さ夜ふかき四月の月は妹かいひし

身よしもしらきてひとゝく

古今六帖 二　従二位家隆

ふる里の山もひとしよりさらなる

くらふ山しかのねそふ秋風にふく

同　衣笠内大臣

こたい草にかけのふかけれは
かなしきねとせとそなりぬる

同新宰文　同

いそれのかたよる野にそのなる
うけてもしれしと思ぬ日かな

寛元三年法蓮經哥　為家

草のなから葉ことに消あとつる

かなしやこの前世の野へは

歎草

述懐哥とて　後嵯峨院

世にはなれしひおもひわたるあとそつらし
しつみけるわか世にもまたこの船

百首哥の中 述懐の心を　後九条内大臣

思ひとのこするわれならぬそ猶つらし
夕なみかけてそはしかすへし

文永二年百首哥中　神祇伯顕仲

志賀ひこれ霞みけりなかきさゝら
くるしき物ハ夕ゆきみれハ
建長二年毎日百首　為家
小倉山雲の下葉りまちて散
あらしに世をそむくしるしなれ
家集七ノ一百首　同
うつそし世ハ慈嵐山の瀬津くら
ふかき流もくちぬ立みかるか一哉
為家百首　従二位家隆

昔せしそたうとき露まさきつら
いつしか心深みちつくもをとむ
為家百首　源兼前関白家
月にかへて移りそ物かはきつら
くらゐ人ともなく枝枝もおかし
嘉禎新三　為家
末頃の上そひとる吉流れ
をひらのむかえてなかりけん
同　衣笠内大臣

永日もくるゝはをしの見まつら
末ハゆくらむ藤のなみの井
安楽寺宮亭　　同
藤の花さくをりの山のふもとつゝら
夕日もあをきみか月のなそらし
永久四年百首作者　　源仲正
紫の色八野辺のつゝらふしそ
鶴のつ庭はくつゝ物もなし
永久四年百首作者　　藤原忠房

宮さしぬ春の山のふもとつゝら
春ハくれとも藤の花さきかゝる
顕季家歌合　　みかくしてす
心人のさぬ羽の京乃藤浪ゆる
夕日きえとゝまらしめる
百首守山　　藤原為昭
青つゝら藤こえかゝると山の
下ふかよえぬみちうつりさき

蘆

民部卿為家

和哥の浦代々のあとは京立とも
にごれはしらぬそのたつ波

寛元入道摂政家歌合

津国の難波いかにて思ふらん
君かよはひを世々のあと京

寛元元年中　同

あちかせもすさの入江のあとかも
みとりはしらぬ名はことはり

建長八年百首歌合中　同

いかなれとうきぬの浪よりも芦の
下にこそれしわきりをとこ

宝治元年百首　同

行つきの雨の君のうけゆく
ゆかりのうつろやのいけにけり

建保三年四月下旬比内裏歌合　前大納言為氏

はるかなるみかとの瀬の流にも
芦の葉分にしけりしかは流の世

亀山殿七百首歌に　　家隆

大井河かはの月はかはりけり
のちもこゝろこそまたのみやらん

堀川院百首　　按察使資平

大井河ゐせきにかゝるもみちはに
錦のかけはゆるしなかりし

日　　権大納言公実

霜かれの芦人のかりころもまかふ芦は
紅のあやもすさめさりけり

文永百首家百首秋　　大納言師継

津の国のなにはのうら風吹かはり
ふかきし芦の葉のみそよくなる

新勅撰集夏　　洞院摂政

あけてみる芦の下葉に霜さえて
二月のうらは雪はまたなり

集　　後京極摂政

みなせ川芦まにかよふなみの音に
たえまく堀江こくなり

同　基俊

塩風に浪のよるなる流芦の
をれても春をまつとこそまて

続集

さゝれ川井でなる芦のかりそめに
あさ屋に屋かりの一夜かりは

同　同

のちとひの津の国の芦の根もなれ
うき世中はとてみかりせり

三十首人々によみ侍けるに　元真

葦の根のかれにし河波をさしてのみ
いとゝのうきねとこそせんとそ思ふ

百首歌中に　後鳥羽院

立返芦のわかれの一よをも
かりねの夢世流てなみ間

続集　好忠

さゝれ川井でなる芦は寒きかれて
うけはるなへり春みけり

権大納言忠家

こひしさも[illegible]のあはれ[illegible]
都にて[illegible]色さやか[illegible]
此哥は津国へくたりける[illegible]
女の都へ[illegible]
さらぬとそ[illegible]
つかはしける也とそ

[illegible]
順徳院御製

[illegible]
[illegible]てすみける[illegible]の此月

新葉雑上
後村上院

すみのほる[illegible]
[illegible]

永保三年十月[illegible]歌合[illegible]
源頼綱朝臣

もろこしも[illegible]
[illegible]

[illegible]住吉社歌合[illegible]述懐
[illegible]内大臣

住吉の[illegible]

あらち川そてよ神のかくらふ

宝治百首夏　　為家

夏川のあしのわかはのよはえふ
うらくたまれる名のみしけ雪

宗撰新六二　　同

人ならぬみそしも世ともなき流れの
うきことのかくれたえまもつゝ

同新六二　　正三位知家

ふもしもれうさきす川でよおもかれ

うきしまや人の契りのあさからん

建保三年名所百首　　従二位家隆

鶴のゐるくて田蓑の嶋も所多へて
芦のはの乱るゝ浦風ふくつ

永安二年広田社哥合別当法眼　　知頓法師

みなつ汐子隠やこゝろんあさりする
芦のまの住吉の岸のほとりてなけ

永保元年十月十九日前内大臣家哥合　　藤原雅経

難波江の浦のなかめのなかなかに波と

みえつるそてはらはれしあしのわかるゝ哉

名所十首　右近大将通忠

難波かた芦の花よりふく風に
浪のをとしも君そちりける

千首哥中　法橋顕昭

住よしの細江の芦もかれそめて
まねくも見えぬあらしふくなり

同　家長朝臣

浪よせし浦風ちかきあしのはの

難波芦海をとゆかさねて今も　後京極摂政

仁治二年百首

乱芦のはかむしろそよ風のきほひも
秋をとそよく汐海のしら浪

文永元年七社百首芦　大蔵卿有家

汐みちて浦入江もしすゝきのうれ
うきねの芦もかれかよはり

建保三年内大臣家百首芦　安嘉門院四条

とく宿よ人めかゝりいかれ芦の

とをかりしてさくやまつらん

題しらす　万葉

みなと芦のあしの中なる玉小菅　人丸

かりこそせとことのへうしよ

家集

湊舟のとふし河よみとよけて　同

夕きりかくれ河そ鳴なれ

応二年

あしたみそこさ行舟は玉浦舟　よみ人しらす

あしたの在衣しつきふかくさんかも

年たちのきりにゐつ人会はるま　それみかれえ　天暦御製

うきことの湊にすそよおもしきを

ひさかたのとりのとよひはつね

長寿五

あさの歌のさ濱川りいおさこい　人丸

ありてなれたる夜のよすかきく

くよさかふみれみ芦の在ま

よ海のまおみりりえとこれ

海雲

百首歌　前中納言定家
此比ハ雲に風ありうきみなる
よのなかくもしるしのやどの雲

宝治百首歌合見恵　法橋顕昭
妹かすむあたりいそかせさそふなる
うたかたみなかにまよふ浦かな

万葉集名所歌恵　後鳥羽院
ちぬの海のなかはるかにたちそふる

うたみなとにゆふしまうかふる
万葉集名所歌ともよせちと　為家卿
いそなつむあまのなかそ塩竈の
うらにゆふしほみちゆく雲のかゝる

みなとえのあかりの浦にうきまよふ
たえぬなかれにたさ川にはる　家人
ぬるみなとのうち　よみ人しらす
日吉十三

伊勢の海の釣のうけなるたのかたる
ゆくかたもなしきことするまこゝろかな
つらき哉

新千載五　同

おもすなる人ふかくひきさきの海の
おそひの浦にたちかへる
藻

同第七　同

宇治河のせゝにせかるゝすゝりのいかにさへきと

とつてきこゆなりへとゝかきまのこと

同第九　同

難波かた塩干にいてゝ玉も刈
あまのをとめらなか名のらさね

家集　大納言經信

かるもかりきて塩干にはね代
あれは網屋あまりやすらん

永承四年内裏歌合　池水　伊勢大輔

池水のよゝにひさしくすみぬれは

みることもなし光そへなる月

千五百番歌合　　　法橋顕昭

さま事しけそふるかな和哥の浦子

身なしむも何もなも嘆き月

續集歌合　　　徳大寺左大臣

田子の浦のあまの磯も浪の上に

うかれてはあまもしらぬ浦

宝治二年百首歌　　　為家

帰られて我身もくもる立月

あしの屋くさしみちひきかん

文永元年七夕百首　　　同

ひを魚のよるかはせ流るの

玉もし海もまもいとまもやかん

嘉元々年　　　中務卿親王

ことわりの人の心はされしもの

ならひくともみるもたのまれぬ

建長八年百首歌　　　光俊朝臣

あま浦の刈藻にかりしてしなむ虫の

名ハ絶なかりけりとみつへし

禖子内親王家歌合池氷を　義忠

春の池りこゝへかまほるみすか
あさしもとしもかくれしまとなり

新しら寸乃三　人丸

玉藻川としもとるらく夜半の
野山寄り時雨もまさるこゝろ

七ーろ万二　同

ちよ鳥のあさたつ人の川のぬかりせすま

なよ竹の玉藻ハなかりせいふかれ
かさ里けり

新集兵部卿　貫之

いろしらぬ花をかくしておもすゝ川
なかりてたれも玉もなとかるらん

宗報歌合　光俊朝臣

みさこゐる磯のまさこにまかせて
須磨ハ人影くらもとなるらむ

蘆

題しらす　よみ人しらす

ちこ薦刈と上のかりゝれみこりゝ上
恋こしひ妹かひもとくみましいは

三字花中　好忠

かは河帰りみての為こそ刈かすれ
住よしのをとめ人なこりそふれてそふ

三善為人　後京極摂政

秋萩花のれえ見ゆとて娑りつゝ
またもこそいはこぬきの為蕎

永承之恒例のよしよみ侍りて　和泉式部

古流れにかはりてうれかの君かまつゝ
玉は夜れかしうりけりつゝ葉

寛弘中宮代　相模

三鴻けやまるこれ田にこそ宿刈よ
志けく行くるとを近めらむ

題しらす　よみ人しらす

刈つもれひとくさくもてたえぬれと
君ちかしぬ道はおとけくもなし

同歌合

みちのくのよそにみしかとも なかにや君を待さしてわすられにけん　同

久安百首

君まつとよふけの月をみしほとに 待とのこゝろ秋そなりける　前参議教長

同院摂政家百首

山川の浪やの風こそあはれなれ いはこそこれいくたひも岩　為家

文治六年

刈てほすよとの眞こもあさいて ちりぬるおもひ我秋こそ　信実朝臣

風吹はみなもしつこゝろなく 龍まちかけの河みつ　後久我太政大臣

身ともしるこのみすれまさりさき うつてつりぬるの枕におもふ　俊成女

家集ニ同し　西行上人

刈初ところ氏池ともなかりて
けもちのある帰るなかるな

蓮

文治六年女御入内屏風　皇太后宮大夫俊成

なゆしとてあさるれ蓮ハ何なると
乱るゝもあまの野色の川なや

同集　定家

我やとの蓮ハいつしか香風こし

あますゝし後のよまてそみのかけ

毎日一首中　為家

さころ行さのかりせれ絵れよりさかそ
うつ行海の月ハなかりき

同

みるともしあやめハかすしなる里れ

同

影れ思ふ子な池し菊なもさかふ

同

長池のたえるわれのさふ何としても

ちるまゝ蓮の池をさくなん
寂蓮法師

身にしみて風のうへにひく露は
蓮の葉ことにいくらともなし

貞応二年前内大臣家百首
よみ人しらす

くもりなきとこなつの色をみるはしりなき

正治二年百首
前大納言忠良

よふね山もとのけにこほりつく

よりくるまゝに風そよくなる

嘉禎新三
信実朝臣

巻向の檜原にたちのほるまれ
松のけみとも人ともひなり

弘長元年百首
同

山のけよ蓮の池の松はなり
我もこゝろのうちにひとる

後集
和泉式部

頼の身てみえつゝ物をとゝろかなの

よるは秋風吹かしぬらん
隆信朝臣

よりさうねん
霜むすふ庭のおもひ草すゑまての
ふりまさりてみはしるかな
家隆

のきにたる
こよひしも庭の蓬の枕かな
思ふ吹よとあるのうちの夕ひかり

秋雑中万葉
思ひ草
人丸

道のへの尾花かもとのおもひ草
いまさらさらになにかおもはん

堀川院御時百首
仲実朝臣
いはの海の蘆の下なるおもひ草
みちをこゝろもしとはるゝや

建保三年名所百首
正三位忠定
春日野は霜わかれのおもひ草
下はおもひのかれて秋そなき

同三年内大臣家百首
家隆

春日野下ゆく霜かれのおもひ草
みりよころハ外そしるらん

同二年内裡ニ云暁坊恋　同

あらつきの床ハ塩せのおもひ草
人をみんらくの落ともなし

建保元年老若歌合二首　定家

春日野や下のしもえもおもひ草
君のちくみハ兎ありまける

正治二年仙洞百首　披述懐　同

勢霜の色小篠ニ流るおもひ草
夢えをハうらしもしるの原

同廿首　隆信朝臣

あさちふの露のよすかおもひ草
冬をとこ後一葉ニ云のなもなし

光臺院入道親王家五十首恋　従二位範宗

いつかせん思ひのとくのおもひ草
我のこゝろとく年色まちり

思草

六帖題哥 二

信実朝臣

人しれぬおもひのいろのせかれはそ

我か思ふハさそしのふらん

忘草

延喜六年月次屏風之哥　貫之

おもひやる住の江にハしのふくさ

忘れし人れ又やほまぬと

萱草之万代

中納言兼輔

こゝ時もみてくるくさまん歳なり

うれへこそ千よろつ草としけるなり

建保四年百首　定家

下もえは猶すてゝしたにむすふひもなき

忘れ草とや忘れつけなん

嘉元三年十月百首　参議為相

下ひもおひつけよる草ハおもひして

ふりしれぬ人ハおもひうけ

百代草

名寄詠人

法橋顕昭

百代草とし秋まてなてしこのめかし
りそめ偽しのちらめつらん　光俊朝臣
六帖歌新古一
我宿ハ花の園なる百代草
りく秋姫窓袖ぬらしつゝ
白菊草
ろそあそりとよつと　前参議雅経
たよりあふよもせ井の庭の白菊草
とふくもあつりうつりかりなれ
永仁元年歌合にて
藤原雅有
思ひ草秋の八月のはきちりて
うつりもゆくハ露なほしきそ
人小許草
六帖歌新古二　人丸
冬くる霜ふかれはかれしなかりかれ
人こそ称の称ろ子ぞ人のこゝろさ
新千五十
あしら我世中のふこゝろすこやかに
如覚内大臣

我とゑらして今はなかく

木

同万吉

忘れさは袖もかへしもむすひつく
うけらむもれ名もりいる手枝め

同

月

あさか山こ陽ひの枝によ茂人いは
うけしもの名かくらやも

新続拾六二　正三位家隆

あさかやまさしてものいそくまさ
名もそ見えてねはふもくれしつ

萩

玉葉

萩こそは人の物おもひ山萩を　和泉式部
おもふみ月よきけりむしろ那

天暦十年坊城右大臣家歌合山萩

これつとなくたの海なく帝かり　よき人もとすす

ろうよ名よかぬ山きけ

同　月

これは名にし山の菅代くとゐく
かりつくぬ多は寒のをとみゆる

嘉永元年中　浪曙亭更勝斎
いろは世葉野沢にせつかけよる菅の
かゝるとけも名に寒すゆなむし

嘉永七年歌初次家千之　光後郎臣
霧深青海のふせく沼ちるゝ菅の
ちりしく名神のぬまししあたし

六祝歌集二　庵豊同大良
かくれぬるのこゝろをしれ山の岩こゝけ
いかにもあつきこねはなくれつゝ

同　修寅
すゞのねのむへもうしとさゝれ
水にゆふうこ流るゝへ言ん

同歌是け　権僧正石紀
下ねさしてさかれ入江の志のひをけ
思ひもあへぬをとうこさ世なかれて

新千載 万十　人丸

山しなのこはたの山をむまはあれと
かちよりそわかくる汝をおもひかね

百首哥　法橋顕昭

あとしなきこゝろそやまし山しなの
はなのこすゑをいつかおもはん

同　正三位季経

いつまても心ハいくよのみちなかれ
花もちる吉野の苔の枕に

千五百番哥合　野宮左大臣

山かけはいつをかきりとすみそめの
ねさめのさかりぬるのまそふらん

西園寺入道太政大臣家百首哥　従二位家隆

嵐吹雲のかけはし吉野山
そらのねしのきこゑかはりし

正治二年百首　喜多院入道二品親王

あはれやなよるかなしみ吉野の
みちなとけれかりけりもとを

詞し寸万十一　よみ人しらす

み吉野のみくまかすけをあまなくにかりのみかりて乱れなんとや

同万七　同

春日山高からし石の上乃ちろのねこひとまちらそは

同万七　同

橋立のくらはし川の青菅我かりて笠にもあまぬ川の青すけ

万十一　同

むは玉のくろかみ山の山すけにこさめふりしきしくしくそおもふ

同六帖　同

大君の三笠にぬへる有馬すけありつゝみれとことなきわきもこ

夫木出雲万七　同

あしからの海のこすゑのはまの枕

出雲かうちなんよろせす枕

国立公文書館
National Archives of Japan

寿永元年九月歌合に　兼実

何しろの山より出けむ清見かた
月ふかみとも見えかゝりけり

家集　　同

風吹は箱根の山乃まこもけ
あしひきく我おり人しらぬな

建保六年百首歌　従二位家隆

いせ山の岩のまかひのもりに清
からすとそやまけりけん

建久元年百首歌　衣笠内大臣

いろいろに折やそめんいろの浦
なこの乃小菅むらおりまて

七百首十八　中納言家持

みやしにのこゝろの浦なこへの
とけのゝもしろにかひしすゑ
いなけきて

建保二年百首　順徳院御製

雲深やこ宮の山の岩こえけり

たえまとも見えし霞さゆかしろ
題しらす　人丸
み渡せハ三室の山の岩こすけ
思ろまゝれハかきあつひとゐ
同
あさかのま立られて小菅狩られて
往ぬ人しかのるゑさらん
寄沼　民部卿家
あさかのま立るハ小菅かるへきの
枕ゆかしてとし一夜あかすしは
同　同
あさかの〱露の白玉おきかへて
からふれてあさき袖みそ鳴らる
家集　従二位家隆
夕ま川夜ゝ多の岩こす
ぬきもさこめぬまろうつる
宗祇新家　衣笠内大臣
山陰のみとけのみけ年をへて

あさなあさなもしもひとりかなたかな

同　新古二　　正三位知家

みな人の笠ぬふ事あり語の

よふふけゆくもしらぬなかね

同続古六　　同

ものゝふのゆつるにまけるこゝろ度

こゝろ海になかはたけぬつまなきこと

続古六帝　　後九条内大臣

志かれしなゆきゝ明ゆく日のとも

色なれとこともまよふなとも

新千　　後照念院

なぬなかに小松かれしむかし也二番

まろとこすともやつれぬこともなし

宝治百首歌合　　山階入道左大臣

下もつ夜千の山の岩こけ

いまそみむ月の年をへにけり

七夕方云　　よみ人しらす

みつてよりせるかくれかくれ

えぬ川よ名をしらすかすりのねさり
一乙女子

葛

前しすり百首　よみ人しらす
河よみのねしろのこすやあまたまし
行のしてしそてまそかつら

家集花宴　俊頼朝臣
をみ川ねしろ高くやからまれた
をかあさせなるもこあはれそ

久安百首　実清朝臣
姫かうこあきみた野の露霜に
葛かうら葉も色付にけり

[illegible]百首　後徳大寺左大臣
高砂の葛か[illegible]よ吹あらしそ
あれも猿のや[illegible]うらみん

六百番　寂蓮法師
粟津野の葛か下葉おかいして
うらゝさや秋の夕くれ

文永八年七月千首中　　民部卿為家

葉津の芦の末葉をそよかせて
入江のかりしか浦風

千首歌　　同

よしとふよ人にはたえてそいふなれの
芦の下なりしもそ見えしなりにけん

元久元年　　前大納言忠良

いつの音も秋の末葉になりぬれて
霜かれ行庭のをきかな

浜木綿

題しらす　　人丸

みくまのゝ浦の浜ゆふもゝへなる
心はおもへとたゝにあはぬかも

十題百首　　寂蓮法師

浜ゆふのうきさまの数をいくへまて
こひかけるか和かの浦波

仁安二年経盛卿家歌合　　資隆朝臣

見ん夜の浦に浜ゆふよみかさねて

いくへなれのこゝろ見えてはかなし
此哥判者云歌の後中よきと云
なかくは立かさねたる人なるとか
哥の心せさる事まてあると
つくろひ給まてこれいなさこやう
ふしそ申給まし悦さらふ人
ましそ給まし此哥ハおもしろく
なたにこといふめして行さめ
らは一さのしやしありけれは程

ふしめしのゝのしたまへるなる
なりしなれは後中よりくる九
よなほやうあさて左申さ給く
とそひ出給ましておくも後
程よほうろつこそくるよめ
かいなしつ事給ましてゐまし
ハ男女の中しれ事なり知せむ
しそあるめ此云よいいかなりしう
行園晒かれる事ろそなむ

とくかやさえれてうらへ膳上
きところく　待賢門院堀川

久安百首

あいぬすは海の浪ゆふくれは
ことよのうとと夢にみえねと

嘉禎新六二　光俊朝臣

かれつゝ海浦漁捕之網をりて
夢かしは人とみきりしめもせん

小宰相

十題百首　寂蓮法師

山川のひとひてそくさゝめそ
夜のせれとゐ流ととさつゝ

堀川院百首　仲実朝臣

月きよみあきの北原乃白露に
さゝめかふ海わもし流ねまゝ

藍

洞院十首家　よみ人しらす

人しれぬ思はたえねまとしてとあれの

くくる藍の花さしつけしやらや
土御門院御製
百首歌中
いくしほとさとのまとゐかけむもしろきに
なとみれからぬ藍乃ふかき
宗尊親王家百首
かりそめにつくるは藍のうすはなぞ
正三位知家
あさくそめしみえ色もなき
紅
よみ人しらず
たをやきし紅の花の二藍山風
ここちまれちりにしぬかむせろ
同
からくれなゐのさかりの山風まつと
ことよしのあふことのはかなしくまさる
宗尊親王
民部卿為家
竜田姫のまほろ花のなつかしく
いろかはりもつきたちそめや
紫

題しらす　よみ人しらす

むしさろの常とさけしゝ寺庵の

のハそかしてんハそらし

同　中納言家持

はつくろのはしもぬこゝぬくし深

やまさこそ深して見しるまくらり

同万尺　應蓮満春

かゝ人のふるむそふむしさりの

心かゝみてかりかりたこゝ御

建長廿三年〇百首歌〇　よみ人しらす

しら年のりあかひさむかり青め

我はあたりて後のまよひろゝ

同

ほかのりとこそふかれ長日地れ

野のよ人ゝ一ろ葉つあする

同

久安百首　前左衛門観隆

ほかれ枝のこゝろむそふさすのかれ

あひとありもと人知らぬや

久安百首　為家

嵐ハ吹てくら井の高ねの花
ちりぬともうらむなきもろこしの

六帖題新字　衣笠内大臣

みよしのの山の嵐の夜さむく
つくしともしらし松かせり

麻

新六帖百首　よみ人しらす

雨ふれはあさ生の下草露しけし

あけてたに秋かん観ハ志すまことに

文永元年毎日一首中　為家

雨ふるあさの山もさえわたる
はなりくそでもまたいつく錦ん

十題百首　寂蓮法師

夏の日のこゝろすゝしき魚もなし
さそふあさちのたまの風

久安百首　郁芳門院安藝

夏衣やまけたつ野らのあさきぬに

なをし夕立の風もとめぬらん

正治二年百首　　土御門内大臣

刈りやとにあさの風立ちえそよさこそは
夜のまくらにねつかすきけは

家集　　正三位知家

我宿ハいつよりあさとなる沢田のあさ
あさの衣にさむき末の露ふれて

三百六十首中　　好忠

みな海の川そあさてをめぐりねもよふれは

ちえんよもかれてしらせる出しき

萍

うれ家六二　　よみ人しらす

こりえにひきかへくらつの萍みなは
あくそ人ハ恋しうきもあり

宝治二年百首　　正三位知家

さのとやかうきに年へし萍の緑も
定ぬ物かはいひし人多く

渚砂

六華和歌三

信実朝臣

み山には夕雨はれて立ちのほる色

そこにこゝろのまゝそ猶ともそふるかな

同　知家

足引の山本そこ深くぬるゝ袖かな

こゝろあきをまちそなたちかけむ

同　民部卿為家

池水のしきなみよする春のあはれに

うちはへてひとめもみえぬ袖の露

蓼

同　衣笠内大臣

鷺のゐる川への蓼の穂そてにかゝりぬ

夕日さひしき秋の水かな

同　正三位知家

垣ねなる蓼の穂末に露おきて

もえ出し秋は乃衣手

同　信実

みな底の蓼の色すさましつゝむ人そ

なにはやあしまにてまもなく

同　　光俊朝臣

うき世にかゝるとのこゝろしるその

かつきめふかて関なら宮れし

文永元年六月

一　　後光明峯寺摂政

けくそのかへふふかま一しらなれ

立井にかへくくそ秋そらのき

正嘉元年十首

よみ人志らす

ふくからに草はなかりそねかへそと

かつらきれあらしの見えさきとかれ

同宗尊　　同

有明のかけふるさとのあきをそみれ

うらしや人にあはぬこゝろは

弘長元年中

好忠

やかてそても川乃せにもれはせまり

うらしや稲色年をへて

久安三年百首

民部卿為家

かつきみれはもゝやさな太そての

かりにこしかりしより月人のすみた
それよりさきの承保にかきと　恵慶法師
こその花も万葉しぬまたかたさめにハ
ふうふりきとそみて海のしら浪
六帖題新六一
荷　衣笠内大臣
なには江のわさ田かりあまたかさなれ
蓮もこゝろ人とゝく露やは
日
たひぬ海よりも田ありあまた月草の　民部卿為家
ねよりあらハまくく袖ぬらしけり
万葉　未　万中　西行上人
あすひとくくはのこそりハ風わたるとは
清水に物思ふ心はまきもこの雅
水葱
六帖題新六二　衣笠内大臣
いなしき入て葱の草を風わたりけり
あはれのこゝろもとよそなりて
日
民部卿為家

露むすふ田中の井ともなはしろに

おもひしほるゝ夕かけのそら哉

同　正三位知家

なかのまきほへこえひたふるまてなかるゝの

こなたかりとよみくかり川かな

同　信実朝臣

あまりにも緑の日陰かれあをのうへにあまた

ましてふるこそとるやまかせもん

母子草

寄草　知家或アリ

もれさしんとえてを云の形ふ

たくしはかなくこすらかそ

此哥ハ石義より野花とこ世

ころ名りしさりら入て

年数よりてとこく

駒鷲

貞應二年五月卒　民部卿為家

女房も和歌ハ取ノ書て入にあまき

おちかゝるしくれや川とゝめそし

太子草

同

えのこ草とのかゝ忍しおす出そ

秋をとく露ね出やとゝらん

土筆

同

さほ姫の筆かとそ見るつくし

宮くれふ門きゝ見えしきは

打萩草

同

秋ミおときゝつる庭の萩しき草

いとゝ露をやすゑはさらまし ん

鏡草

同

かゝとなくこれるみなかゝきくさ

雪語はへ月よりみつきはく

竟

玉葉秋　　清輔朝臣

川千鳥なくや川風身にしみてくさ
すそ野をかへ一本薄さそよ

村荻

玉葉秋下　　西行上人

よもすから月こそ袖にやとりけれ
むかしのあきを思ひいつれは

苅萱

新拾遺秋上　　民部卿為家

あきくれはよそのゆふへのさひしさに
月田かへれはひとつ人もなし

光俊朝臣

同

外山ふかみこのしたかけのねさめにも
おちくる人のつゆのなみたは

芝

弘長三年内裏百首哥　　前大納言為氏

露ふかきのはらは秋の
みちの芝草ことしたけくらしも

嘉禄元三　民部卿為家

いかにせんうちわたるのまえの年をへて
あかぬなつかりしせつなきを

同　正三位知家

むかしよりふかき山の里に宿ありて
道の芝生をしきしそあさきの

同　同

鶯もまつ春へのうへひかる芝かくし
永日かすみもやまて(?)

同都六二(?)　信実朝臣

春風のうちしくる芝の鶉鳴
さそひ所色ありなかりけり

同　同

むかしの花の芝草かりそく
春の袂まちにし人まねく(?)

同　光俊朝臣

百歳の庵のこゝろ芝よる霜に
芝とかりしとめ遠しり袖かぬ(?)

落葉を　　右兵衛督雅定

おほゐせきにかゝれるもみぢ葉の色も
ひとくろもしこりけれと

堀河院御時百首歌たてまつりける　右中納言宗忠

夕山の峰よりいづる水のおもに
ちりしもみぢの色をみせつゝ

堀河院御時歌合に　前太宰大弐

ちりしや霧の底をわけて
うちすぎゆく人もなし

嘉承二年　正三位知家

暁の霧の底をわけゆけは
秋のとたえし月影

つれづれに　権僧正永縁

いかなりし人めかしれぬ
さかりをみむやまちる

同じ心を草

題しらず　よみ人しらず

あさ川のながれに

こりつゝもくれは我と思ふ物を

夕陰草

同万七　笠女郎

我宿の夕影草の白露の
けぬかにもとなおもほゆるかも

指穂草

能宣中六一　よみ人しらす

穂りきんいふくそ見しはな草
そのおもひかしこそ流れ

同六三

下野やしめちか原のさしも草
そのおもひにもえや燒らし

正治二年百首　皇太后宮大夫俊成

何しとも草さしも思ひぬ中なれは
おもひけりともいふはしかのと

宝治百首人家集点　寂蓮法師

あさ風しやゝたちおもひのさしも草
恋流もとさきあるてそいはゝなかゝらん

此歌左乃中ニ云後拾遺ニも
いまきこえよせくるこゑもなし
ちとせまてなれ給ひあてしをと
あけほのいつれか左勝云右方に
さくらの花の色とみえたれは
よしや判者俊成ニ云右方
波よりも高くさく花の色も
松にかゝる事も織にあまり
あらまやと云く

藻

正治二年百首　式子内親王
みるめこそいるゝ藻の影もなれて
あはぬ夜ことの月のかけかな

門　正三位経家
峯の戸を藻の藤のさしこめて
風のあとにもいつもめなりけり

建仁二年五月影供十首歌合　俊成女
藻くつよせ風にあまりつくく

萩のはなちらん秋ハ風あらき風

新葉　　　　　　　葉室家仁

しらさきて阿まさる宮ゐまさりたれ

かりねと思ふ風きこえありけり

い　　よ向尊

新千五一　　　　河鴻皇子

さく波の清き流のよろこひき

いく代まて田の年のあかん

続千五二　　　　よみ人しらす

かゝ山をこえてゆくぬのゝうら川

よこりをとめらよあふさかのま

さもけ草いとよみをとまてなし

こそり

芭蕉

続千載入　　　　前参議教長

秋風にあふせをいれぬをもて

きかりもあらぬ世とやいはん

新葉　　　　西行上人

風吹ハあらしやまもとの紅葉の
あれなとも色粉もしらなみの

寂蓮法師

きりくと海波にまかれて
うみの雨にふる庭のなをも見

あそ為家卅首中

民部卿為家

いうくれ山のかくれぬ花を藻に
風しては秋風もあふし

莫鳴第

天仁三年四月内大臣家歌合　藤原忠通

るかりそと刈ともあまの海のみさ夜
とのまたまかる海の衣にて浦ぬらね

よみ人しらす

きくの花にいそよ刈かとまるなみの
なみろあてなきあひしかなるな

嘉応新宮二

民部卿為家

秋の浦よちれなかりそそれしかかり
うつろふけるに花のさかしさ

同　　　　　　　　　　　信実朝臣

いとつらく須磨の浦わに寄る波を

末見ぬ人にしられつゝまし

同　　　　　　　　　　光俊朝臣

いそなれてありふましきのあまの

あのつまとしらしは知る人ぞなき

和布

同花摂政家百首歌　　正二位知家

うれしかる浦の寄るへは小舟なれや

信そこよる浦わの夕なかり

恵俊法師　　　　　　　よし人ぞ寸

難波かた塩ひの浜にありあまるよ

人のみなかたにのみことりし哉

足和布六二　　　　　　同

白波とよりうけ浜の夕暮の舟は

命ふかるみ浦の夕暮の塩

同六三　　　　　　　　同

こゝろ海にしきのいそ人なみなかとは

ことせりきそともこゑも別てよ
常盤井入道太政大臣
くれこしろの竹乃園よりとりやりて
あはれやこゝは家ちりもかな
源仲正
夕されは海の林に風吹て
やそふのさしろ夜は涼しき
慈鎮和尚
嬉敷事に賀茂のみつかきとん坂世ハ

昌平坂學問所

あらく次の竹みなかよりきり
同
みとりもよしのあらく次の名み結竹の上
賀茂乃三山み山おろし乃風

昌平坂學問所

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan